



学校法人大阪初芝学園 教諭
平林 千恵さん
Hirabayashi Chie

西宮市の公立小学校で教師として指導にあたり、その後同市の教育委員会で指導主事を務める。兵庫県の「新学習システムあり方検討委員会報告書」の策定にも参画し、現場と行政の両方を熟知。2022年から現職。



大阪大谷大学 教育学部 教授
今宮 信吾さん
Imamiya Shingo

兵庫県公立小学校、神戸大学発達科学部附属住吉小学校、関西大学初等部教諭等を歴任。プール学院大学教育学部、桃山学院教育大学人間教育学部等を経て2021年から現職。今号の本誌でコラムの連載が始まります。

現場での受け止めは

続けて、「兵庫型教科担任制」がどのように実践されていったのか、学校現場で指導にあたった先生の声をうかがいました。

まずは実際の現場で「兵庫型学習システム」が導入された当時のことを知る、平林先生にお話をうかがいました。

導入当初は戸惑いも大きかった

これまで私たち小学校の教員は、音楽の時間など一部を除いて、ひとつの学級の中で子どもたちと過ごしながら指導をしてきました。私立の小学校や国立の一部で教科担任制がとられているのは知っていましたが、いざ自分たちの現場に導入されるとなると、歓迎よりも、戸惑いのほうが大きかったように記憶しています。

大変だったことの一つは、時間割を組む作業です。ひとつの学年のクラス数が偶数であれば、授業の交換は比較的にスムーズですが、奇数クラスになると一転、至難の業となります。国語と社会、理科と算数のように、週当たりのコマ数が違う教科を交換するのも大変です。これに専科の授業が加わると、さらに複雑になります。そのうえ、運動会などのイレギュラーな要素も加わってきます。そのようなときは授業の交換を一旦停止して、終わったら再開するなどの対応をしていました。最初のうちはとにかく頑張っ

教科担任制のメリットを感じ始めて

続けていくと、だんだんと教科担任制のよさや有効性を実感できるようになっ

てきました。

初めのうちは、自分のクラスを他に任せるのが嫌でした。ですが、社会の状況が変化する中、現場にも「クラスはひとりで見ると」から「クラスはチームでみる」という意識が芽生えてきました。実際、そうでなければ複雑な社会の中で生きていく子どもにも有効な対応をとることができない現実がありました。

自分が気づかなかった、子どものちよつとした変化を他の先生が見てくれていたり、自分と相性のよくない子どもでも、他の相性のよい先生のもとで生き生きとできるなど、複数の目で子どもを見ることで、現場に新しい風が吹き込んでくるのを感じました。

また、負担の軽減もよさの一つでした。授業交換をすることで、教材研究の時間を1教科分減らせます。時間数としての空き時間が増えたわけではありませんが、教材研究に注ぎ込める時間が増えたことで、授業の質を高めることができました。

子どもと保護者の反応は

子どもたちは、おおむね新しい変化を歓迎してくれていました。学級担任とは異なり、毎時間同じ教師が授業を行わないので、前の時間に少し嫌なことがあっても、次の時間に別の先生から授業を受けることで気分転換が図れたようです。

「次の時間は〇〇先生だ、こわい」「理科は平林先生だから嬉しい」など、あれこれ言いながらも、多くの先生に出会えることを結構喜んでいたと思います。



保護者に対しては、毎年必ず、年度初めの「学校だより」で、複数の教師の目で見守ることを伝えていました。

気をつけていたのは、教師間の指導のルールを統一することです。授業に特色を出すのは問題ありませんし、むしろどんどん行ってほしいですが、「あの先生は厳しいけれど、この先生は甘い」といったように、教師間で基準が揺れないように配慮しました。そうすることで、「どの先生も、学年のことを同じ目線で話してくれる」という信頼につながっていくと考えていました。教員同士のつながりが土台となり、その上に子どもたちがいる。それが「チーム学校」なのだと思います。



●「新学習システムあり方検討委員会報告書」研究協力校の実践から(小学校)

取り組みの課題

▶事務的な負担軽減は図られているが、学級担任の持ち時間としての軽減には至っていない。

▶時間割の関係上、理科で2時間とれず1時間ずつのため、専科教員は準備と片付けに追われている。

▶理科の実験の場合、学級担任であれば柔軟に時間割を変更できるが、専科教員の場合は調整が難しい。

▶英語の加配教員が兼務で、曜日が限定されるので、時間割の調整が難しい。

▶学級数が増えて3学級(奇数学級)になったので、学級担任による交換授業が難しくなった。



取り組みの成果

●学級担任と加配教員が協力して、支援を要する児童に関わる時間をとることができる。クラスは落ち着いた。

●加配教員が副担任のような関係になり、テストの採点や分析を効率的に行うことができる。

●学級担任の空き時間が増えることで、ゆとりをもって生活指導や個別指導に時間を割くことができる。

●不登校傾向のある児童が遅れてくる場合に、空き時間で学級担任が対応することができる。

●人間関係によるトラブルに学級担任が対応しなければならぬ時間が減った。



最後に、今宮先生に
お話をうかがいました。

兵庫県は国に先行する形で、少人数学級と教科担任制を行ってきました。今回文部科学省が行うとした教科担任制には、優先教科が設けられ、授業の質的保障を盛り込んだことで、現在の学校現場の実情に合わない面が生まれています。

また、学校規模によっても、教科担任制による教員の適正配置に大きな差が生じる可能性があります。余談ですが、GIGAスクール構想によって、これほどICTの活用が叫ばれているのに、情報の授業の担当ができる教員は絶対的に不足しています。学習の環境が地域差や学校規模に左右されないための、法の整備や運用の工夫が急がれるでしょう。

兵庫県の先生方は、これまでの実践があるため、今回の変化にも比較的スムーズに対応されていると感じます。しかし、教科担任制のシステムは難しく、理解するのが簡単ではありません。「朝の会のあと、終わりの会まで子どもたちと顔を合わせなかった」というギャップにも対応しなくてはいけない。円滑に運用するまでに、ある程度の時間が必要になるでしょう。

これからの教育の在り方としての理念には賛同できる部分は大いにありますが、残される課題も意識しながら向き合っていきたいと思っています。